

今井俊満とグスタフ・クリムトの金銀についての一考察

令和1年7月23日

放送教材第15章では芳賀徹が今井俊満（1928－2002）との交流を語っていた。1950年代のアンフォルメルが活気が伝わってきた。今井は1983年頃からは「花鳥風月」を描く。芳賀は今井の中に「もともと実に精緻な優雅さがひそんでいたことはたしかである」と語っている¹。その今井は1952年のアンフォルメルの初期から金銀を使っていたと話している²。一方でグスタフ・クリムト（1862－1918）は「黄金様式」の時期に多くの主要作品を描いた。この二人は西洋画では珍しく金銀を多用したが、本稿はそこに何らかの共通項があるのか、共通項があるとすればそれはなにかを考察しようとするものである。

第1は、金銀を使用するに至る経緯である。今井はアンフォルメルの頃は目立つほどではないが、「苔と石」（図1）などの作品にも金を使っていると思われる。そして「花鳥風月」では金銀を多用する。一方でクリムトは1890年頃には装飾美術において金を多用しているが、額縁のデザインも自ら手掛け、ジャポニズムの影響を受けて額縁を金で塗り、そこに花を描くようになる。1897年にウィーン分離派を結成し、1898年には画の中にも金を使うようになり、1901年の「ユディトⅠ」（図3）では画と額縁の金が融合して「黄金様式」が始まった³。1903年にイタリアの古都ラヴェンナにあるサン＝ヴィターレ聖堂のモザイク画に感銘を受け、「黄金様式」を加速させた⁴。

第2は、金銀を使用した理由と効果である。今井は「光」を希求するために金を使ったと語っている⁵。また「花鳥風月」を始めたのも日本美術の独立に挑戦しようとして、日本の伝統を現代化するために金箔を多量に使うことを思いついたと言っている⁶。「花鳥風月」は日本画ではなく、筆を使わずに型紙を使ったポストモダン的な現代絵画⁷であるが、「紅葉賀」（図2）などは金銀が華やかさを演出している。一方クリムトは浮世絵、鎧兜、能面、仏像、着物などの日本美術を収集していて、自然に黄金を使用するようになった。1908年頃までの「黄金様式」の時期では、尾形光琳の紅白梅図の影響もうかがえる⁸。「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像Ⅰ」や最高傑作の「接吻」などの代表作を生んだ。金は人間を異次元の世界に導く象徴であり、超現実の世界を表現するものであった⁹。

第3には、二人が金銀を使用したことの共通項である。今井は日本では金は「平家納経」や金屏風や金の仏像など、金を上品に使いこなしているという¹⁰。また今井は「私が花鳥風月で行った伝統再生の作業は古典主義とは全く異なる。私は伝統芸術の奥底を流れる、定かならぬ全体、そこに回帰したのだと思う」と述べている¹¹。クリムトもジャポニズムの影響を受けていたので、日本美術の受容は一つの共通項である。そしてもう一つの共通項は古典主義を超えたところでそれぞれ独自の表現様式を創造し、発展させたことである。

以上を受けていえることは、今井とクリムトには、日本美術の受容、そして古典主義を超えた独自の表現様式の創造と発展という二つの共通項を見出すことができるのである。

1 芳賀徹『藝術の国日本—画文交響』角川学芸出版、2010年、460頁

2 松岡正剛『色っぽい人々』淡交社、1998年、46頁

3 平松洋『クリムト 官能の世界へ』株式会社 KADOKAWA、2018年、81頁

4 千足伸行『クリムトへの招待』朝日新聞出版、2019年、17頁

5 松岡正剛『色っぽい人々』淡交社、1998年、52頁

6 芸術出版社編集『今井俊満の真実』芸術出版社、2003年、43頁

7 松岡正剛『色っぽい人々』淡交社、1998年、51頁

8 池上英洋『西洋美術史入門〈実践編〉』筑摩書房、2014年、145頁

9 千足伸行『クリムトへの招待』朝日新聞出版、2019年、17頁

10 松岡正剛『色っぽい人々』淡交社、1998年、52頁

11 今井俊満『花鳥風月』美術出版社、1989年、30頁



図1 今井俊満《苔と石》1968年，130×162cm，油彩・カンヴァス，個人蔵

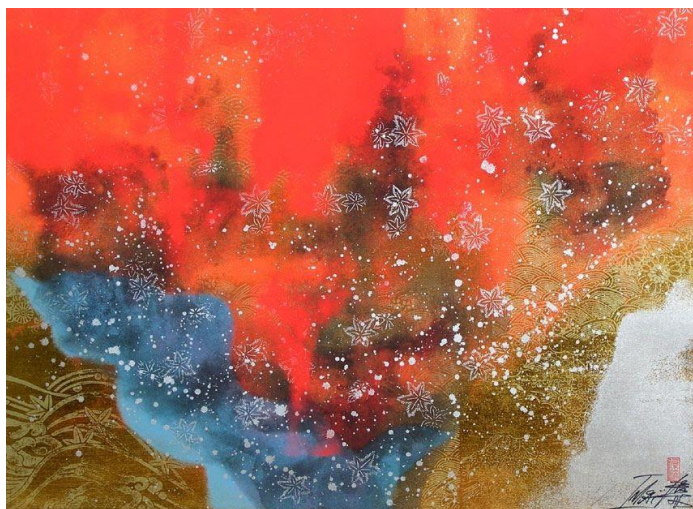


図2 今井俊満《紅葉賀》1993年，200×300cm，アクリル・カンヴァス，作者蔵



図3 クリムト《ユディットI》1901年，84×42cm，油彩・カンヴァス，ベルヴェデーレ宮オーストリア絵画館蔵